

令和 6 年 6 月 7 日現在

機関番号：32517

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20K00153

研究課題名（和文）日系アメリカ人美術家と戦後日本美術の国際化に関する研究

研究課題名（英文）Japanese-American Artists and the Internationalization of Post-war Japanese Art

研究代表者

桑原 規子（Kawahara, Noriko）

聖徳大学・文学部・教授

研究者番号：90364976

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、1945年から1960年代前半までの日系アメリカ人美術家（在日、在米）の活動の調査を通して、彼らが戦後日本美術の国際化に果たした役割を検証することを目指した。その結果、内間安セイが在日アメリカ人と日本人美術家の橋渡し役、ジョージ蔦川が米国側から招聘された渡米日本人美術家の受け入れ先となり、イサム・ノグチが米国で開催される国際展に日本人美術家を参加させるための口添え役、渡米した日本人美術家や帰米した内間安セイのサポート役という重要な役割を果たし、日米美術交流に貢献したことが判明した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

在日・在米の日系アメリカ人美術家たちが戦後日本美術の復興と国際化に果たした役割については、具体的な研究がほとんど行われず、日本の戦後美術史にも記述されてこなかった。本研究では、日米の美術館や研究機関、作家遺族宅に所蔵されている資料の調査に基づき、彼らに関与した活動とその意義について明らかにした。それによって、日系アメリカ人が果たした役割が明確となり、これまで見落とされてきた戦後美術史の新たな側面が解明されることに繋がったと考える。

研究成果の概要（英文）：Through a survey of the activities of Japanese-American artists (both in Japan and in the U.S.) from 1945 to the first half of the 1960s, this study aimed to establish the roles they played in the internationalization of postwar Japanese art. As a result, I found that Ansei Uchima served as a bridge between expatriate Americans in Japan and Japanese artists, George Tsutakawa acted as a host for Japanese artists invited to the U.S., and Isamu Noguchi acted as a facilitator for a Japanese artist's participation in an international exhibition held in the U.S., as well as a supporter of visiting Japanese artists and of Uchima on his return to the U.S.. Thus they made important contributions to the exchange of art between the U.S. and Japan.

研究分野：日本美術史

キーワード：日系アメリカ人 日米美術交流 戦後日本美術 国際化

1. 研究開始当初の背景

日系アメリカ人に関しては、歴史分野で研究が進む一方、美術分野においても1999年には国際巡回展として「アジア系アメリカ人芸術家1945-1970：伝統と抽象」展（丸亀市猪熊弦一郎現代美術館ほか）が開催され、Gordon H. Chang et al., *Asian American Art: A History, 1980-1970* (2008) が出版されるなど、戦後の日系アメリカ人美術家の芸術について紹介される機会は存在していた。しかしながら彼らが制作活動とは別に、終戦後、日本の美術界とどのように関わったのかを検証する研究はほとんど進展していなかった。

一方、こうした状況のもと、研究代表者は基盤研究(C)「在日欧米人ネットワークと戦後日本美術の評価 英文ジャーナリズムを中心に」(2011-2013)、「1950年代日米美術における「人物交流」プログラムの研究 米国財団・国務省を中心に」(2017-2019)を推進する過程において、複数の日系アメリカ人美術家が戦後日本美術の復興と国際化に重要な役割を果たしていたことを確認した。アジア太平洋戦争中アメリカにいた日系アメリカ人美術家たちは、強制収容されたり、アメリカ人として従軍したりと、日本との交流は断絶の状態であったが、終戦を迎えると、日・米両国語をこなせる彼らは、日米の美術交流において重要な役割を果たすことになるのである。ただ、従来の戦後日本美術史の記述に日系アメリカ人美術家が登場することはほとんどなく、等閑視されてきたというのが実情だった。これが本研究開始当初の背景である。

2. 研究の目的

本研究は、日系アメリカ人美術家（在日・在米）が戦後日本美術の国際化に果たした役割を検証することにより、戦後日本美術史のこれまで見落とされてきた一側面を解明することを目的とする。具体的には、在日・在米の日系アメリカ人美術家が芸術作品の制作とは別に、日本の美術家のためにいかなる活動を行っていたのかを問い、その経緯と内容を明らかにし、彼らの支援が戦後日本美術の復興と国際化にどのように繋がったのかを解明することである。

対象とする時代は、終戦から1960年代前半までの約20年間とする。占領期には数多くのアメリカ人が日本に住み、日本美術の収集や評価に関わっており、日系アメリカ人が果たした役割は大きい。また占領解除後の1952年から1960年代前半にかけては、日本の美術家が集中して渡米しており、在米の日系アメリカ人美術家の支援が必要とされていた。一方で占領解除後は、日本がサンパウロ・ビエンナーレやヴェネチア・ビエンナーレに参加するなど国際化の時代を迎えており、1950年代に米国で開催された美術展への参加は国際進出の貴重な機会であった。したがって、1945年から1965年までの20年間は、日系アメリカ人美術家の活動が最も必要とされ、また具体的な成果を生んだ期間であったと考えられる。

3. 研究の方法

本研究では、「日米両国をつないだ美術家」という視点を導入し、米国と日本の双方が所蔵する資料を調査、海外の美術研究者と緊密な情報交換を行うことにより、研究を推進する方法をとった。具体的には以下のような調査研究であった。

- (1) 2020年度以前の科学研究費課題「在日欧米人ネットワークと戦後日本美術の評価」と「1950年代日米美術の「人物交流」プログラムの研究 米国財団・国務省を中心に」で蓄積した資料を整理し直し、そこから日系アメリカ人に関する情報を抽出し、研究協力者と共有した。

- (2) 支援を行った側（日系アメリカ人美術家）と支援を受けた側（日本人美術家）の資料調査を海外と国内で行う。

海外調査：研究計画では、日系アメリカ人美術家の資料調査を毎年米国の美術館や大学のアーカイヴ、作家遺族宅で行う予定であったが、2020年から新型コロナウイルスが世界的に流行したため、海外調査が中断された。よって、調査対象を絞り込み、アメリカでの調査は2023年の2回（ニューヨークとワシントンD.C.、ホノルル）に限定した。

国内調査：2020年より海外での調査が不可能となったため、調査の重点を支援を受けた側（日本人美術家）に置き、国内の美術館所蔵資料、作家遺族所蔵資料の調査を推進した。

調査対象の美術館は和歌山県立近代美術館、青森県立美術館、秋田市赤れんが郷土館、丸亀市猪熊弦一郎現代美術館、長谷川三郎記念ギャラリーなど。作家遺族宅（吉田遠志、穂高、千鶴子、ふじを）では、研究協力者の江口みなみ氏と基礎資料の調査・収集を行い、日系アメリカ人との接点を分析した。

- (3) 海外の協力者とはZoomやメールなどで情報交換をしつつ、研究を進めた。特に2021年にはフロリダ州のリング・リング美術館で斎藤清展（*Graphic Awakening*）が開催され、カタログにエッセイ執筆を依頼されたので、担当学芸員のRhiannon Paget氏と情報交換した。また、2023年にはニューヨークのプリント・センターで*A Model Workshop: Margaret Lowengrund and The Contemporaries*が開催され、展覧会カタログにエッセイを執筆した

ので、編著者の Christina Weyl 氏と情報交換した。いずれのエッセイも研究協力者である味岡千晶氏に翻訳を依頼し、意見交換を行った。

- (4) 当初は研究期間の最終年度に海外研究協力者を招聘してシンポジウムを開催する予定であったが、新型コロナウイルスや経済的問題も生じたので中止とし、その代わり研究代表者が研究成果を単著として出版することとした。

4. 研究成果

研究期間中、研究代表者と研究協力者は協働して研究テーマについて調査を行った。その結果得たおもな成果は以下の通りである。

(1) 日系アメリカ人版画家内間安セイとその妻俊子（旧姓・青島）について

終戦後、日本に住んだ日系アメリカ人は数多く存在した。その中でも重要な役割を果たしたのが内間安セイ（1921-2000）である。彼は1940年から早稲田大学に留学、戦中・戦後と日本に在住していたが、1947年に軍属として来日したオリヴァー・スタッターが日本人版画家の調査を行う際に通訳として同行し、*Modern Japanese Prints: An Art Reborn*（1956）の刊行に貢献、在日アメリカ人と日本人美術家の橋渡し役を果たした。*Modern Japanese Prints* は日本の創作版画が国際的に知られるきっかけとなった書籍であり、内間は同書の出版以後、CWAJ（The College Women's Association of Japan）主催の版画展立ち上げにも助力した。一方で、自身も版画家として作品を発表し、新進美術家として国際展にも版画を出品した。

1954年に結婚した内間（青島）俊子もデモクラート美術家協会で活動した美術家であり、彼女もまた版画の制作を手がけ、1956年には吉田千鶴子、岩見禮花、南桂子、小林ドンゲらと女流版画会を設立し、国内外で展覧会を開催した。

その後、二人は1959年に帰米、1960年からニューヨークに在住して美術家として活動し、日本とアメリカの美術界をつなぐ役割を担う。たとえば、渡米した日本人の世話、ニューヨークにあったプラット・グラフィック・アート・センターでの日本人版画家たちの展覧会や講演の援助、インターナショナル・グラフィック・アート・クラブと日本の版画家たちとの仲介、1960年に来日した石版画家アーサー・フローリーのサポートなどである。日本の美術界を熟知し、日・米両国語をこなせる内間安セイは、戦後日本版画が国際的評価を得るうえで欠かせない人物であった。

以上のような研究成果は論文で発表すると同時に、『戦後版画にみる日米交流 1945-1965』（せりか書房 2024年7月刊行予定）で章を設けて論じている。なお、2026年には公立美術館で「内間安セイ・俊子展」が予定されているので、二人が戦後の日米交流において果たした役割など本研究で明らかとなった情報の提供を行い、展覧会の充実に貢献したいと考える。

(2) 日系アメリカ人彫刻家ジョージ蔦川について

ジョージ蔦川（1910-1997、シアトル）、ポール堀内（1906-1999、同前）、チューゾー・タモツ（1981-1975、サンタフェ）などアメリカ在住の日系美術家たちは、1950年代に国務省やロックフェラー財団の「人物交流」プログラムで渡米した日本人美術家をアメリカ側で受け入れ、支援した。当初はそれぞれの作家について調査研究する予定であったが、新型コロナウイルスの影響で3年間渡米できなかったため、日本側資料の調査で情報収集のできたジョージ蔦川について研究を進めた。

その結果重視したのは、ジョージ蔦川が国務省から依頼された日本人の受け入れ担当者だったという点である。1950年代に日本から渡米した複数の美術家がジョージ蔦川の世話になっていた事実が判明した。たとえば、斎藤清、益田義信、吉田穂高・千鶴子、関野準一郎、阿部展也、草間彌生などの作家である。ジョージ蔦川は、シアトルに渡った彼らの面倒をみると同時に、ジョーゼル・ナムクンやポール堀内、マーク・トビー、グレン・アルプス、モーリス・グレイブスケネス・キャラハンなどノースウェストの作家たちを紹介し、相互の交流を図っていた。とりわけ斎藤・関野とジョージ蔦川周辺の美術家との関係は深く、ジョーゼル・ナムクンと妻の美根子はシアトルに「Hanga Gallery」を開設し、斎藤のエージェントを務めると同時に、関野の版画も売買した。斎藤が日本に帰国したのち、1964年から67年にかけてワシントン州を巡回した斎藤清展のエージェントもナムクンだったことは、注目に値する。

斎藤清とジョージ蔦川との関係については、2021年にフロリダ州のリング・リング美術館で開催された斎藤清展カタログ（*Graphic Awakening*）に執筆したエッセイと「斎藤清 国際性と地方性」（『論叢』2022年3月号）で論じた。

(3) 日系アメリカ人美術家イサム・ノグチについて

イサム・ノグチ（1904-1988）については、2019年に横浜美術館で「イサム・ノグチと長谷川三郎 変わるものと変わらざるもの」展が、2021年には東京都美術館で「イサム・ノグチ発見の道」展が開催され、彼の芸術そのものに関する研究は進展している。しかし、イサム・ノグチが1950年代に米国で開催された展覧会への日本人美術家参加の口添え役として、また渡米した日本人美術家のサポート役として活動していたことについては、ほとんど注目されていない。

1953年、長谷川三郎を中心とする団体、日本アブストラクト・アート・クラブが設立され、翌

年ニューヨークで行われた第 18 回アメリカ抽象美術展に 9 名の日本人美術家が参加したが、その口添え役となったのが、イサム・ノグチである。彼がアメリカ抽象芸術家協会会長のジョージ・モリスに長谷川に連絡を取るよう助言したことから、この展覧会は始まった。結果的に、同展は 1955 年に日本で開催された「日米抽象美術展」(国立近代美術館)へと繋がったのである。その意味において、イサム・ノグチは日米の美術界を架橋した人物ということになる。

また、アメリカ抽象美術展への参加のため渡米した長谷川は、アメリカ滞在中にコンテンポラリー画廊で石版画を制作し、個展を開催、アメリカの美術界とも積極的に交流をもっていたことが判明した。この事実については、2023 年にニューヨーク・プリントセンターで開催された展覧会カタログ (*A Model Workshop: Margaret Lowengrund and The Contemporaries*) に、「20 世紀半ばにおける日米版画の交流」という視点からエッセイを寄稿した。

イサム・ノグチが果たした役割には日米抽象美術展の仲介役ということだけでなく、1950 年代から 60 年代にかけてニューヨークに渡った日本人美術家のサポート役という側面も見られた。たとえば、長谷川三郎が 1953 年にニューヨークで開いた個展 (ニュー・ギャラリー) では、訪米できない長谷川に代わってインタビューを受けているし、内間安セイが 1960 年ニューヨークに移住する際には、プラット・グラフィック・アート・センターの経営責任者フリッツ・アイケンバーグを紹介し、仕事の世話をしている。また、棟方志功が 1959 年、森泰が 1960 年にジャパン・ソサエティの版画プロジェクトで渡米し、個展を開催した際にはオープニングに参加し、展覧会を盛り上げている。このように、イサム・ノグチはニューヨークに住んで、渡米した日本人美術家を後方から支援していたのである。

本研究で得た成果は、2024 年 7 月に出版予定の『戦後版画にみる日米交流 1945-1965』に収録するとともに、2024 年 7 月に府中市美術館で開催される「自然、生命、平和、吉田遠志」展に寄稿する論稿にも反映させる予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 桑原規子	4. 巻 -
2. 論文標題 吉田遠志とアメリカ 1950年代を巡って	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 「自然、生命、平和 吉田遠志展」図録	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 桑原規子	4. 巻 30号
2. 論文標題 20世紀半ばにおける日米版画の交流－ニューヨークを拠点として－	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 聖徳大学言語文化研究所 論叢	6. 最初と最後の頁 41-60
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 味岡千晶	4. 巻 -
2. 論文標題 Hiroe Swen in Japan: early life to 1950s/ 渡豪前のスウェン博江－1950年代まで	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 The world of Hiroe Swen's ceramic art: educational resources and digital archive	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 桑原規子	4. 巻 29
2. 論文標題 斎藤清 - 国際性と地方性	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 聖徳大学言語文化研究所 論叢	6. 最初と最後の頁 27-45
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 江口みなみ	4. 巻 72巻2号
2. 論文標題 ヒトラー政権の芸術政策と帝国日本の美術界	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 美学	6. 最初と最後の頁 36-47
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.20631/bigaku.72.2_36	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 桑原規子	4. 巻 28
2. 論文標題 占領期の日本美術支援団体サロン・ド・プランタン (1949-1953) について	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 聖徳大学 言語文化研究所 論叢	6. 最初と最後の頁 107-127
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

[学会発表] 計2件 (うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 桑原規子
2. 発表標題 斎藤清と戦後日本版画の国際化
3. 学会等名 聖徳大学言語文化学会 (招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 桑原規子
2. 発表標題 戦後版画にみる日米交流 占領期を中心に
3. 学会等名 明治美術学会
4. 発表年 2024年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 桑原規子	4. 発行年 2024年
2. 出版社 せりか書房	5. 総ページ数 -
3. 書名 戦後版画にみる日米交流1945-1965	

1. 著者名 Lauren Rosenblum, Christina Weyl, Noriko Kuwahara, et al.	4. 発行年 2023年
2. 出版社 Hirmer Verlag GmbH	5. 総ページ数 120
3. 書名 A Model Workshop: Margaret Lowengrund and the Contemporaries	

1. 著者名 Rhiannon Paget, Noriko Kuwahara, Paul Binnie, Judith A. Stubbs	4. 発行年 2021年
2. 出版社 Scale Arts Publishers, Inc.	5. 総ページ数 213
3. 書名 Saito Kiyoshi: Graphic Awakening	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	味岡 千晶 (Ajioka Chiaki)		

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	江口 みなみ (Eguchi Minami)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関